

先週私たちは、アグリッパ王の前で成されたパウロの弁明について見ました。その中でパウロは、主イエスに出会うまでの以前の自分、また主に会った時の様子、そして、その後どのような者に変えられたかについて語ったわけですが、そのようにして自分は、天からの啓示によって神の奉仕者、主の証人として立てられたというのです。それゆえに、自分は、今も生きておられる主イエスに遣わされることで、これまでユダヤ人にも異邦人にも悔い改めて神に立ち返り、それにふさわしい行いをするよう宣べ伝えてきたと言いました。主を信じるすべての人が、罪の赦しを得、御国を受け継ぐ者とされるためです。

そして、そのことは、実に預言者たちやモーセが語っていたこと、つまり、聖書を通して神様が語っておられたことだとパウロは主張しました。すなわち、神様は、キリストが苦しみを受け、死者の中から最初に復活されることで、ユダヤ人と異邦人とに光を宣べ伝える、と預言者たちを通して語っておられたのです。ですから、神様がユダヤ人の父祖たち、また十二部族に約束しておられたのは、実にこの主イエスのことであり、すべての人は、彼を信じることで、死者の復活としての神の救いを受け取ることができます。

そのようにしてパウロは、アグリッパとその同席の人々に、弁明というよりは、主を証していたわけですが、それに対する応答が、今日のところに記されています。24節「パウロがこのように弁明していると、フェストが大声で、『気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わせている』と言った」。ここでは「パウロがこのように弁明していると」とありますから、彼の話はまだ途中だったのでしょう。でも、それを聞くに耐えれなくなったフェストが、このように言うことで話は中断されます。

なぜフェストは、パウロが気が狂っていると思ったのでしょうか？それは彼には、以前の総督ペリクスとは違い、ユダヤ教に関する知識がなかったからです。ですから、パウロの件をどうさばいてよいかわからない、とアグリッパに相談したわけですが、ただ彼としては、パウロの博学は認めていました。でも、パウロの語る内容が、あまりに彼の常識から外れていたため、気が狂っていると思ったのでしょうか。それもそのはず、すでに見て来たように、パウロが語っていたのは、死者の復活について、つまり、死んだはずのイエスが生きていて、その方の啓示によって、自分は神の奉仕者、主の証人となった、というものだったからです。

では、アグリッパ王は、どうだったのか？大声で「気が狂っているぞ」とパウロに言ったフェストの側で、同じ話を聞いていたアグリッパ王は、それをどう思ったのでしょうか？この時点では、彼は何も語りません。彼の応答は、このフェストの発言に対してパウロが応答した後、つまり、パウロをして、彼がアグリッパ王に問いを投げかけることで、その後に出てきます。まずパウロの応答を見ます。25-26節「フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のことばを話しています。26 王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます」。

パウロは言いました。「私は気は狂っておりません」と。これは、お酒に酔っている人が、「自分は酔っばらっていない」というように、ただ自分がそう思うからという何の根拠もないところから出た言葉なのでしょう？もちろん違います。彼はこう言うのです。「私は、まじめな真理のことばを話しています」と。この「まじめな真理のことば」とは、真実で、理性的・合理的なことばということです。つまり、パウロは、自分は、真実で、理にかなったことばを語っているため、気が狂っているのではないと言いました。正気であると。

では、なぜフェストには、理解不能と思えたことが、パウロにとっては、まじめな真理のことばであったのでしょうか？ここで彼が語っているように、その理由の一つは、これらのことが片隅で起こった出来事ではなかったからです。つまり、主イエスの十字架の死と、その主がよみがったというクリスチャンたちの主張は、エルサレム中で知られているものでした。ですから、パウロは、それを「真実」として語ったのです。そして、当然、アグリッパ王もそのことを知っているはずだ、とパウロは言いました。

またそのようなことは、たまたま（偶然的に）起こったのではなく、預言者たちによって語られていたものであり、その約束の成就である、ということで、その合理性をパウロは主張したのです。すでに見たように、パ

ウロは、預言者たちとモーセが、後に起こるはずだと語ったこととして、キリストの死と復活について語りましたが、神様は、そのようにして預言者たちを通して語っておられたことを、主イエスにおいて成就されたのです。ですから、「自分は、まじめで真理のことばを語っている。気が狂っているのではない」とパウロは言いました。

このことを語った上で、もともとの聞き手であるアグリッパ王に、パウロはこう問いかけるのです。27 節「アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います」。このアグリッパの前での弁明は、正式な裁判ではありませんでしたが、でも立場的にパウロがさばかれる側に置かれていたのは確かです。ところが、まるでそれがひっくり返ったかのように、パウロはアグリッパに問いました。

このパウロの質問は、実に核心を突いたものであると思います。というのも、もしアグリッパが預言者を信じていると認めるなら、彼としては、パウロのいう「預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこととしてのキリストの受難と復活」を受け入れるしかないからです。つまり、主イエスを救い主と信ぜざるを得なくなる、ということです。では、その反対に、もし預言者たちを信じていないとするなら、どうしよう？彼はユダヤ教徒から異端視されました。

アグリッパの応答を見ます。28 節「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」。彼はこのように言うことで、話の要点をずらそうとします。実に残念なことです。でもこれが昔も今も、主の福音を聞きつつも、その決断を先延ばしにすることで、多くの人が救いの機会を逃してしまう理由です。実は、そのことは、総督ペリクスも同じでした。彼は、主を信じる信仰についてパウロから聞いたわけですが、「正義と節制とやがて来る審判」について語られた時、恐れゆえ、本当なら神様に立ち返るところを、彼はそれを理由に悔い改める機会を自ら逃すのです。「今は帰って良い」と。でも、救いの時は常に今です！

そんなアグリッパに、パウロはこう答えました。29 節「ことばが少なからうと、多からうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになってくれることです」。皆さん、そもそもパウロはなぜ、このように捕らわれの身になったのでしょうか？また、多くの苦しみを受ける中で、神様のこと、主の福音を語り続けたのか？主イエスもそうでしたが、もしパウロをして、彼の関心事が、自分の身を守ることであったなら、そこには、いくらでも逃れる道はありました。

でも彼は、語り続けたのです。それは彼が、真実であり、また理にかなった神のことばを語ることで、それを聞くすべての人が、彼自身のようになることを、神様への願いとしていたからです。「パウロのようになる」とは、どういうことですか？それは文字通り、彼と同じようになること、つまり、同じように天からの啓示を受け、福音宣教のために数々の旅をし、多くの苦しみに遭い、牢に入れられるようなことを意味していたのでしょうか？パウロは、そのように皆が自分と全く同じ生き方をすることを願ってこう言ったのですか？

パウロのいう「私のようになってくれること」とは、彼のように、古い自分、つまり、罪（自己中心）に生きていた自分に対して死ぬことで、その罪人を赦し、生かすことのできる復活の主にかされる者となる、ということです。そのために、自分の悟りにではなく、預言者たちやモーセという聖書を通して神様が語っておられた、来るべきメシヤ（救い主）により頼んで生きる、彼に従順な者となる、ということです。それが救いを意味するわけですが、パウロは、自分を通して主の福音を聞くすべての人が、そのようになることを願うゆえに、たとえ自身の身に危険が及ぶことがあっても語り続けたのです。人々の救いを願うゆえに。

30-32 節「ここで王と総督とベルニケ、および同席の人々が立ち上がった。31 彼らは退場してから、互いに話し合って言った。『あの人は、死や投獄に相当することは何もしていない。』32 またアグリッパはフェストに、『この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに』と言った」。これでパウロに対する審問は終わり、次の 27 章からは、パウロのローマ行きについて記されるわけですが、ということは、アグリッパたちをして、パウロの無罪をこのように認めたからとて、それがパウロの置かれた状況に何か変化をもたらしたわけではなかったのです。

では、この弁明の機会は、何のためであったのか？それはただの時間の無駄だったのでしょうか？いいえ。主は、ここでもパウロを通して、アグリッパ王と、その同席の人たちにご自身を証しておられたのです。そのようにして、主のみこころは、パウロという主を愛する人を通して行われていました。このことを通して、たとえ主への信仰に導かれる人が一人もいなかった、としてもです。

では、皆さんにお聞きしますが、今日あなたは、パウロが語った「まじめな真理のことば」を、文字通り、真実として、理にかなったことばとして受け止めておられますか？そのことが、神様をして預言者たちを通して約束しておられたことであり、主イエスは、その約束の成就としてこの世に来られ、信じる者に罪の赦しを得させるために十字架にかかって死なれ、また御国を受け継がせてくれるために、死者の中からよみがえられたと心から信じておられるのでしょうか？その主への信仰のゆえに、あなた自身もまた、やがて死者の中から復活するという希望を抱くことで、主から与えられた日々（今を）を、悔い改めにふさわしい行いとしての主と主のことばに聞き従う歩みへと進んでおられますか？

そのような主への従順な歩みは、すでに主に「死者の復活という望み」を抱く人には、当然のことと言えるでしょう（そうであることを願います）。でも、そうでない人にとっては、気が狂っていると思われるものなのです。そのような人に出会う時、私たちは愛と忍耐をもって福音を語ることが求められます。でも、彼らを恐れるゆえに、それを曲げてしまったり、都合の良いところだけを語ってははいけません。たとえ気が狂っているといわれても、パウロのように、主イエスの十字架と復活を語らなければいけません。

I コリ 15:1-24 「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、5 また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。7 その後、キリストはヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。8 そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現れてくださいました。9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。11 そういうわけですから、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

12 ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。13 もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。14 そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。15 それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。16 もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかったでしょう。17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もお、自分の罪の中にいるのです。18 そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。

19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。…」

皆さん、私たちは、この真実で、理にかなったことばを信じているのです。パウロがそうであったように、私たちも、「まじめな真理のことば」を主からあずかっています。まず私たち自身が、このすばらしい主とその復活の望みに生かされることで、まだ主を知らない人々に、主を証しようではありませんか。